

「教えて！子ども特派員」 人と人をつなぐ顔の見える情報案内



事業内容

新たな施設では、常に新しい情報を発信することを目指しますが、単にイベント情報の案内をするだけでなく、人と人をつなげる情報提供の仕組みを提案します。例えば、子どもたちが舞台の制作・稽古の過程、演者の人柄や役作りに迫るインタビュー、観賞した感想などを一連の記事にすることで、記者となった子どもたちや取材を受ける演者、また情報を受け取る市民にとって、その舞台がより身近になり、関心が高まることが期待できます。

実施することで得られる効果・可能性

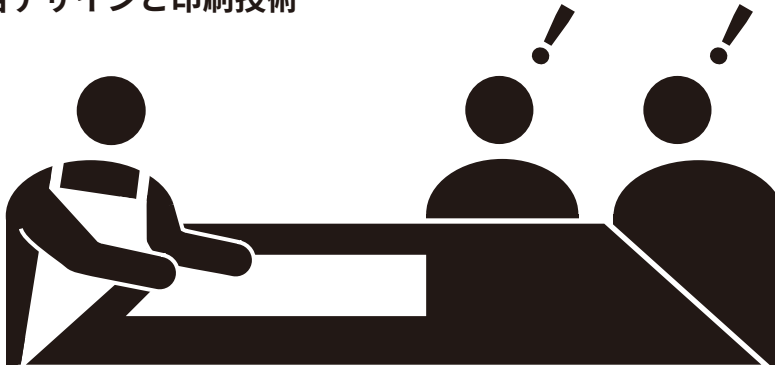
教育活動との連携

文化芸術活動と市民の距離が近づく機会の創出

実現する上での課題

子どもたちの取材・編集作業を支えるスタッフの必要性

「誰でも印刷工房」 プロが教える広告デザインと印刷技術



事業内容

広告作成をしたくても、その方法が分からない市民のために、印刷業者と連携して広告デザインや印刷の技術を学ぶプログラムを提供します。参加者が広告を作る過程で、一定期間施設へ通うことになり、情報交換が生まれます。また、作成した広告はメインの掲示板に掲示できるなど、市民自らが情報発信にかける意欲を高める仕組みを取り入れます。

実施することで得られる効果・可能性

施設の来訪機会・リピーター創出
市民の情報発信力の向上

実現する上での課題

技術提供が可能な企業や個人との連携
資金的サポート体制

「施設運営アカデミー」 施設運営に携わるスタッフの連携・育成



事業内容

文化・芸術活動や地域活動に関わる施設は市内に多数ありますが、それらの活動を連携させ、スタッフの育成を協働で行うことで、相乗効果が期待できます。新たな施設では、施設運営に携わるスタッフを対象とした勉強会、発表会を実施し、各施設における課題の共有や、先進事例の紹介、合同での企画会議など、苫小牧全体における文化・芸術活動、地域活動の活性化を図ります。苫小牧市として一丸となり取り組むべき課題と、各施設の個性を發揮した役割や位置付けについて、スタッフ自身が明確に意識できるほか、施設運営者同士の横のつながりを楽しみながら育んでいく取組です。

実施することで得られる効果・可能性

市内全域での文化芸術・地域施設の連携

実現する上での課題

アカデミーの運営主体となる人材の確保
各施設の協力体制

「広報とまこまい増刊号 文化編集部」

広報とまこまいと連携した市民編集部員による文化情報誌制作



事業内容

広報とまこまいは、市民の貴重な情報源として親しまれていますが、記事の締切日が早いことや、誌面量の制限により詳細な内容を掲載することが難しいこともあります。新たな施設では、この広報の増刊号として文化・芸術活動、地域活動に特化した内容を市民が編集します。例えば、広報でイベント予告がされているサークルへの取材や、公演が予定されているホールでの練習風景の紹介など、市民の関心を引きつける内容を掲載します。また、SNS等のメディア発信を連動させ、最新情報の提供に努めます。全戸に配布される広報の情報発信の強みと、通常の情報誌とは異なる角度で市民自らが取材する増刊号の面白さを融合させた編集部です。

実施することで得られる効果・可能性

日常的な情報誌と連動した文化芸術活動への関心の喚起
 広報の内容をより詳細に補足できる相乗効果

実現する上での課題

広報とまこまいとの連携
 編集スタッフの勤務体制の検討

「北の歳時記～アウトドア展示推進企画室～」 屋外イベントと展示を結びつける企画



事業内容

屋外における賑わいは、普段文化施設に足を運ばない市民にとって、来訪の敷居を低くする一つの要素です。そこで、展示機能においても屋外を積極的に利用します。例えば、月の満欠けの観察会とそれにちなんだ作品を制作・展示するイベントや、ニューイヤーコンサートと雪を用いたキャンドルの飾付けといった、市民による制作や文化講座と連動させた展示を企画します。また、暖かい季節には、制作スタジオの一部を開放し、屋外スタジオとして日曜大工や子どもたちの遊び場作製など、屋内と屋外を効果的に活用し、それが展示につながる仕組みをつくります。このような展示を企画する組織には美術や技術スタッフがアドバイザーとして参加し、市民によるイベント企画などを技術面で支えます。いつ足を運んでも季節が感じられるといった、地域の魅力を発信する取組です。

実施することで得られる効果・可能性

施設の賑わいづくり
文化芸術活動への興味・関心の喚起

実現する上での課題

鑑賞や活動機能で展開される企画との連携
技術・美術スタッフの養成

「トワイライトカフェ・プレミアムシート」 大人が息抜きできる夕暮れ限定の特別喫茶席



事業内容

いつも仕事や家事で忙しくしている市民にとって、ホッと一息ついて静かに本を読んだり、コーヒーを飲んだりする時間は貴重な非日常体験となります。日中や夜間にはぎわう施設でも、ほんのひと時、子どもたちが帰って夜の活動が始まる直前の夕暮れ時のみ、特別に用意した静かなシートとドリンクを提供します。毎日でなくとも気分を切り替えたい時、一人になりたい時などに訪れる時間限定の場所として、大人のより所となることを目指します。

実施することで得られる効果・可能性

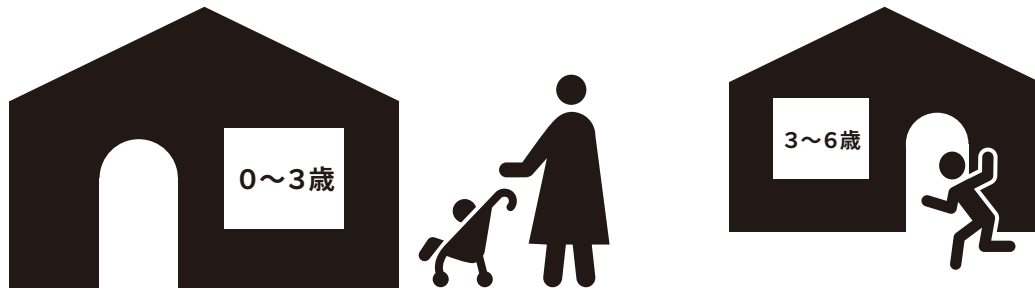
文化芸術活動に関心の薄い市民の来訪
来訪者の特性に応じた施設利用

実現する上での課題

入替え時間の営業体制

「コドモの止まり木」

子どもと親が気兼ねなく楽しめる体験型の展示・観賞プログラム



事業内容

大きな声を出したり、走り回ったりするなど、特に展示や観賞を伴う公共施設では迷惑になることを心配して出歩けない親子のために、仮設的な空間を作り、そこで展示、観賞ができるプログラムです。例えば、乳幼児は添い寝や授乳なども自由にできる環境で音楽を楽しんだり、小学生は家でゲームをする代わりに情報機器を使って親と一緒に展示作品を作ったり、年齢に応じて必要な空間を設けることで、異なる利用者による活動が共存することができます。

実施することで得られる効果・可能性

施設のにぎわいや活気の創出
文化芸術活動への参画機会の提供

実現する上での課題

仮設空間の設営場所・方法の検討
文化芸術活動との連携企画の検討

「魅せる事務室」 人と人の距離が近づくシゴトバ



事業内容

新たな施設では、スタッフと市民が互いに声をかけ、安心して過ごせるような関係を築くことを目指します。「魅せる事務室」は、閉鎖的になりがちな事務室をあえて見せることで、市民からの敷居をなくし、施設の仕事への親近感と信頼を得ることにつながります。またスタッフ自身も常に働く場所への気配りと施設全体への関心を持つことができます。スタッフ間でも部署や表方・裏方の垣根なく自然に協働できるきっかけとなることが期待できます。

実施することで得られる効果・可能性

気軽な施設への来訪
部署・機能間連携

実現する上での課題

セキュリティ、プライバシーの確保

「Living Bar」 いつでも迎え入れてくれるマスターのいる窓口



事業内容

さ細なことで話を聞いてくれる人がいると、特別な用事がなくともふらりとそこへ立ち寄りたくなるものです。「Living Bar」は行きつけのバーのように馴染みのマスターがいて、居間のように落ち着いてじっくり話のできる窓口機能です。専門のスタッフが常にいることで、かしまらず、相談しやすい雰囲気づくりが可能となります。また、スタッフも窓口専門のスタッフとすることで、他の業務との兼業ではなく市民との対話に専念することができ、施設の管理・運営や企画を向上させることにつながります。

実施することで得られる効果・可能性

文化芸術活動に関心の薄い市民の来訪
スタッフの専門性をいかした運営

実現する上での課題

施設案内のみならずカウンセリングが可能な人材確保
特定の市民による占有を避ける工夫